

論文の内容の要旨

論文題目 A hierarchical vision of order: Understanding China's diplomacy toward Asia

(中国の階統的国際秩序観と、そのアジア外交への影響)

名前 ロート アントワン
Roth Antoine

本論文は、アジアにおいて中国が構築しようとする国際秩序を検討する。中国と近隣国間の非対称的関係を考察し、「ヒエラルキー」を中心的な概念として提起し、中国が自国と他国の間で階統的国際秩序の樹立を目指していると主張する。中国のヒエラルキーへの関心を理解する為に、中国の伝統的政治思想を検討し、その根拠に基づいて中国の階統的秩序観の歴史的展開について考察する。まず、儒教と法家の基本経典の概念を用いて階統的秩序の理念型を作る。その理念型には五つの構成要素がある。第一は「秩序」。秩序はそれ自体が根本的な価値である。第二は「階統」。安定を確保する為に、秩序は個人間の自然な不平等を反映し、階統的であるべきである。第三は「道徳」。高い社会的地位を占める個人の道徳的優越性が、階統的秩序を正当化する。第四は「礼」。個人の礼の実践が階統的秩序を具体的に維持する。第五は「統治の道具」。政権は名、威、利という三つの道具を利用し個人に礼を実践させる。そして、中国史を帝国時代、近代化の時代、毛沢東の時代（1949-1978）、改革開放の時代（1978-2009）と現代（2009-2019）に分け、理念型を参照しながら、歴史的に続けられてきた階統的国際秩序への追求について検討する。

第一の要素、「秩序」について、帝国時代を通じて、中国の政治家が天下の秩序の維持を最も重要な任務であると信じていたことを指摘した後、清末と中華民国時代に起こった秩序観の変更を分析する。特に、中国の知識人が直面していた西洋中心の国際社会に対する非常に悲観的な評価に基づいて、秩序は「守るべきもの」ではなく「将来達成されるべきもの」として見られるようになったことを説明する。そして、中華人民共和国建国以降の中国の指導者の秩序観の展開を分析する。既存の国際秩序に対する批判とより公正な新秩序を打ち立てようとする意欲は代々の指導者に共有されてきた。しかし、既存の国際秩序に対する姿勢は時とともに大きく変化した。毛沢東の革命外交路線はのちほど既存の国際秩序に適応する改革開放の現実的路線に差し替えられた。そして、習近平政権になってからは、秩序を否定するのではなく、改革を要求し、中国の国際地位を積極的に向上させようとする路線に変わった。

第二の要素、「階統」について、まず帝国時代を通じて、中国の優越が国際関係の絶対的的前提として見られ、たとえ不利な勢力均衡ゆえにその優越性が守れなかった時にも、王朝は中国国内に対して優越性の外見を必死に守ろうとしたことを論じる。そして、清末と中華民国時代に入ると、中国の政治家は国家の主権平等の原則が謳われてなお西洋中心の国際社会

が実際には階層的な社会であると断定し、西洋列強との平等を要求すると同時に他のアジア諸国を下位にあるとみなし続けたことを指摘する。中華人民共和国の建国以降も、この見解が変わらない。毛沢東時代に中国は自らがアジア解放の責任を果たす共産主義運動の指導者であると主張し、毛沢東が心に描いていた革命的新秩序も中国を中心とするものであった。改革開放の時代、中国は経済発展を通じて総合国力を増大させることに集中し、国力による国際的ヒエラルキーの中での地位向上に努めた。そのためには安定した国際環境を確保する必要があるとし、近隣国に対して穏健な姿勢を取ったが、それには地域連携を指導する国としての地位を得ようとする意図も含まれていた。そして習近平の時代に入ると中国は自らが「大国」であり、近隣国は「小国」であるとの認識をより鮮明にし、アジアの安定と繁栄に対する責任を担うと主張する一方、近隣国は十分に中国を尊敬しなければならないと要求する。

第三の要素、「道徳」について、帝国時代において、中国皇帝が道徳的に優越的な存在であることは争えない事実とされ、皇帝自身が道徳的に正しい行動を取らなかった場合にも官僚と文人はその行動の美德を様々な修辭学的方法で証明しようとしたと論じる。清末と中華民国時代に皇帝の道徳統治の観念的枠組みを提供していた儒教は否定され、ナショナリズムと共産主義に差し替えられた。しかし、中国は道徳的に優越する存在であるとの主張は消えたわけではなく、むしろ再構築された。すなわち、中国の知識人は西洋列強の「霸道」と伝統的に「王道」を守った中国を対比させ、これからも中国が帝国主義に反対し、アジア諸国をより公正な国際関係の様式へと導くことを論じるようになった。その議論はほぼそのまま中華人民共和国の指導者に受け継がれ、1950年代に「平和五原則」の擁護という形で定式化される。その後、この原則、あるいは変わりつつある国際状況に応じて修正されたものは、中国の道徳的優越性に対する主張の根拠とされ続けた。代々の指導者はアメリカなど西洋の大国の「パワーポリティックス」と「覇権」を批判し、自国のより美德のある行動を自慢した。習近平の「新型国際関係」と「人類運命共同体」も平和五原則から発展したものである。それに加えて、習近平は中国の伝統的道徳性によく言及し、現代においても中国が国際正義と公平の擁護者であると主張する為のもう一つの論拠として利用しようとしている。

第四の要素「礼」について、まず帝国時代に王朝が構築しようとした「礼による秩序」を分析し、その機能を明らかにする。礼は皇帝の優越性を具体化し、王朝が監督できる近隣国との交渉の枠組みとしての役割を果たしたと論じる。そして礼による秩序が清末に滅びても、中国の官僚と知識人は現代外交上の儀礼に関心を持ち続けたと指摘する。民国時代以降も自国の国際的地位を非常に重視し、様々な象徴的地位を得ようとした。毛沢東時代に共産党は北京が世界革命の中心であると証明しようとし、ベトナムや北朝鮮など近隣国との外交において中国の優越性を示そうとした。改革開放の時代にはより慎重な姿勢を取ったが、国際首脳会議で中国の地位を重視し続け、積極的な外交活動を通じて中国の指導者が世界中で尊敬されている為政者であるとの印象を作ろうとした。そして、習近平の時代に入ると、「一帯一路」など様々なイニシアチブを通じて中国をアジアの国際交流の中心にしようとしている。さらに、「礼儀正しい」行動（中国のイニシアチブを支持し、それに参加し、中国の国際的指導的役割に賛同すること）と、「無礼」な行動（すなわち中国の行動に対する批判、領土主権など「核心利益」に損害を与えること）の基準を設定し、それを近隣国に守らせようとしている。

最後に第五の要素、「統治の道具」について、帝国時代に王朝が他国に礼を実践させるために使っていた手段は今でも当てはまると主張する。まず、現代中国の指導者は正しい「名前」の力を信頼し続け、帝国時代の爵位制度と同様の機能を果たす複数のレベルからなる現代的パートナーシップのネットワークを構築している。そして、武力行使が中国の「威信」を守り、他国の悪い振る舞いを「処罰」する手段であるとする。さらに、他国に経済的な「利益」を与えることで服従を奨励する。このような考え方が帝国時代から現代まで存続していることを示す為に、複数の歴史的、現代的事例を提供する。

本論文の議論をまとめると、現代中国のアジアにおける秩序観は帝国時代の過去と強い連続性を見せ、階層的なものである。中国は道徳的優越性を主張し、その根拠に基づいて近隣国に対して自らへの服従を期待している。また、中国を中心とする地域外交の典型に参加し、中国が定める「行動の基準」を守ることによって服従を具体的に示すことを要求している。そしてこのような構想に基づく秩序を実現する為に、様々な手段を積極的に用いる意思を示している。その中国の意図の理解を深めることは本論文の目的である。